

## 配付資料

### 写真投影法1 (出典<http://aplumeria.me/blog/20131204/>)

まず始めに「あなたの人生において大切なもの」というテーマで写真に撮ってくださいと伝えるところから始めます。撮ってきてもらった写真をもとになぜその写真を選んだのかということを開いていきます。写真というところがとてもユニークなポイントです。これは写真投影法と呼ばれるものです。心理学の分野では、心の中を言語化することで、分析であったり、カウンセリングが行われてきました。ただしその言語化する過程の中で失われてしまう情報があるのではないかという考えもあります。そうした考えから生まれたのが、描画法というものや箱庭療法になります。描画法では実際に絵を描いて表現してもらい、そこから分析を行っていく手法になります。その時々でテーマを与えられるのですが、「自分を描いてみてください」などといった指示をして絵を描いてもらいます。箱庭療法では、砂の入った木箱に準備したミニチュアを好きなように配置をして、自分の世界を表現してもらいます。どちらの方法も表現したあとに言語化されることがあります。描画法や箱庭療法では絵の上手い下手や、ミニチュアの制限、時間的制限がともされています。写真投影法はそれに次ぐ方法として、京都造形芸術大学の野田教授が1988年に考案した手法であり「写真による環境世界の投影的分析法」のことです。近年カメラの性能が良くなってきたことで、表現がしやすくなり、また絵の上手い下手や、時間的な制限を受けることなく心の中にあるものをビジュアルで表現できるとことが利点です。僕の研究ではこの写真投影法を使って50人に「人生において大切なもの」の写真を選んできてもらっています。

### 写真投影法2 (出典[http://www.kwansei.ac.jp/s\\_sociology/attached/6324\\_52317\\_ref.pdf](http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attached/6324_52317_ref.pdf))

写真投影法 (Photo Projective Method: PPM) とは、写真による環境世界の投影的分析法である (野田正彰『漂白される子供たち』情報センター出版局、1988)。この方法では、調査対象者にカメラを渡し、何らかの指示を与えて写真を撮らせる。そして写真に撮られたものを、自己と外界との関わりとの反映と見なし、認知された環境 (外) と個人の心理的世界 (内) を把握、理解しようとする方法である。PPMは、環境学や地理学、心理学などの学問領域で注目されている。これは、これまで言語レベルでの測定によってしか知りえなかった撮影者の視覚的世界や心理的世界が、写真という視覚的データを介して垣間見られるからである。写真調査の指示-レンズ付きフィルムを渡し、「〇〇大学での1週間をこのカメラで撮影してください」と指示を与えた。写真ごとに、「何 (を行っているところ) を撮影したのか」、「その時にどのように感情をもったのか」について記述するよう求めた。



IMG\_20151124\_0002

# 漂白される子供たち

その眼に映った都市へ

## 野田正彰

情報センター

子供たちにフィルムを渡し、一日の生活を撮ってきてもらうと、想像していた以上に都市の生活と農山村の生活が違うことがわかる。

都市の子供の多くは、映像を通して一日の物語を構成することができず、室内の事物、家の周りの電信柱、フェンス、広告塔などを繰り返し撮ってくる。あるいはむなしさをかみしめ、唯一、感動するものが夕空でしかないかのように、何度も何度も空を写してきたりする。好きな番組のテレビを三本のフィルムすべてに撮ってきた少年や少女もいる。

彼らの写真には人間、とりわけ仲間が乏しい。かわってぬいぐるみ、ラジコン、ゲーム機といった事物への病的な愛着がみられる。

ところが、京都府相楽郡和束町（農山村）の八歳の少年は、まだ子供たちが生き生きとした

感情をもって、育っていることを伝えてくれた。

彼の写真は、見事な物語になっている。彼は台所、子供のいる通学路、茶畑の広がる遠景、学校、校庭、茶畑で作業する婦人、車庫、火の見櫓、小川、土遊びをする弟——などを写してきた。

彼の一日は豊かな感情に満ちている。朝七時に起き、「きょうは寒かった」で始まる。本当は当たり前のことだが、お天気や暑さ、寒さを肌で感じて一日を迎えることのできる子供たちが今、どれだけいるだろうか。

学校に行って昼ごはん——「ハンバーグがおいしかった」。そして、紙芝居作り——「紙芝居の絵をかくて楽しかった。いっぱい絵をかくてしんどかった」。

学校から帰って野菜を引きに行く。「おいしそう」と、湧きでる感情を添え、母と弟が野菜をカゴに入れるスナップを撮っている。

五時から六時、宿題——「かんたんだった」。テレビ、晩ごはんでは、「バカボンをみておもしろかった。グラタンがおいしかった」。

九時に、お風呂。「きもちよかった、ねた」で終わる。

日曜日はこんな風に過ぎる。

八時に起き、「よくねれた」。朝ごはんでは、「おいしかった」。

こんなふうに、自分のしたことに生き生きとした感情を持ちえる子供は多くない。

そして、田おこしを見に行く。耕耘機で田おこしをする人の写真を、近距離から、すこし離れて、あるいは背後から四枚撮ってきている。帰って、テレビを見、昼食を食べ、父と弟と一緒に学校へ行く。彼はグラウンドの鉄棒、築山、野球のネットなどを写した後、ブランコを楽しむ弟の写真をそこに入れる。

